

## 「大出晃のアリストテレス研究について（科学哲学の立場から）」

三富 照久 (Mitomi Teruhisa)

中央大学文学部 (teruhisa31@yahoo.co.jp)

---

故・大出晃（慶応大学名誉教授・2005 年没）は、日本における科学哲学（論理学・分析哲学）の草分け的存在として知られているが、晩年に出版された「知識革命の系譜学」（岩波書店、2004 年）において、科学思想史におけるアリストテレス論証理論の研究から、次の見解を提示した。

- (O1) ガリレオの学問方法論は、基本的にパドヴァ学派のアリストテレス論証「復帰論」に基づいていた。その内容は、「事実による論証」により発見した確実な原因から、「根拠による論証」によりもとの事実の証明を与えるものである。
- (O2) ガリレオは信頼性の乏しい「仮説」から出発して、その真偽を実験により確かめるという「仮説演繹的検証論」としての学問観を有していなかった。
- (O3) 信頼性の乏しい「仮説」から出発して、その真偽を実験により確かめるという「仮説演繹的検証論」は、パスカルの実験（真空ポンプ）により始められた。

日本の哲学科ではアリストテレスの文献学的研究は多いが、大出氏の場合は科学哲学の立場から、アリストテレスの論証理論を科学方法論として研究したものであり、上の見解 (O1) ~ (O3) は、その集大成（遺書？）とも言えるものである。

本講演では大出氏のアリストテレス研究の足跡をたどり、上の 3 つの見解に至る過程を吟味しながら、その意義や真偽について考察する。(O1) ~ (O2) については、日本科学史学会（2013 年）の講演「ガリレオはアルキメデス主義者か？」や、日本科学哲学会（2015 年）の講演「公理は自然法則か？」でも取り上げているが、本講演ではそれらの結果を踏まえ、大出氏の科学方法論としてのアリストテレス研究に焦点を合わせ、その真意をさぐる事によって、科学革命と近代科学のより深い理解を得ようとするものである。

大出氏は若い時に、「アリストテレスの三段論法における格の問題」（1959）で、アリストテレスの三段論法が 3 つの格しかない理由を明確に説明し、「アリストテレスにおける論理・知識・存在」（1980）では、アリストテレス「分析論後書」における「前提の信頼度は結論の信頼度を下回らない」に疑義を示し、「アリストテレスにおける〈懐古的説明〉パターン」（1988）では、アリストテレスの論証が 3 段論法への大前提の〈はめ込み〉である事を指摘し、「アリストテレスの説明論・再論」（1993）では、アリストテレスの目的概念を

未来ではなく既に実現されたものと理解し、「アリストテレスにおける条件付き必然性」(1994)では、アリストテレスの真理論が過去志向である事を指摘している。

注) 以上の大出氏の論文は「大出晁 哲学論文集」(慶応大出版会、2010)に載っており、野本和幸氏の簡明な解題で、読む事ができる。

大出氏は、以上のアリストテレス研究を踏まえて、ガリレオに興味を示して科学思想史の研究を始めるが、その理由はガリレオが晩年に「自分はアリストテレス主義者である」と手紙で告白した事であり、事実ガリレオは若い時にアリストテレス「分析論後書」を中心とするパドヴァ学派の論証復帰論を学んでいた、という事実があるからである。(残念ながらガリレオの論証復帰論の研究ノートは、イタリアの国定版ガリレオ全集に入っていないが、その一部は大出氏により訳出されて「知識革命の系譜学」の付録に付いている)

この論証復帰論はアリストテレスが循環とした、事実の論証と根拠の論証の関係を「復帰」として肯定的にとらえるものであり、その事を一つの根拠として大出氏は前出の見解を述べているのである。フランシス・ベーコンに比べれば、論証復帰論は科学的方法論としての「帰納」について、より近代科学に近づいているとも言えるが、一方で伊東俊太郎や高橋健一などのガリレオ研究で著名な科学史家は、ガリレオを「アルキメデス主義者」と規定しており、ガリレオの科学方法論についての解釈は錯綜しているとも言える。

このガリレオの科学方法論の問題について、大出史の提出した見解の真意を吟味しながら、より整合性ある解釈を与えるのが、本講演の目的である。